

主 題：主が私の羊飼い  
聖書箇所：詩篇23篇

みことばを学びますが、先ず、心を静めて主の前に静まりましょう。

「父なる神さま、どうかあなたご自身があなたのみことばを祝してくださるように。また、みことばをもって私たちひとり一人の心をあなたが癒し励ましてくださるように。また、私たち自身のあなたに対するふさわしくない思いをあなたが示して下さって、あなたのすばらしさを心から喜び、そして、あなたに従う者として、私たちが整えられるように、どうか、あなたがこのみことばを祝して用いて、私たちのうちにあなたのみわざを為してくださるように。この時間を心から感謝して、また、あなたにおゆだねして救い主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。

アーメン」

今朝のテキストは詩篇23篇です。恐らく、このダビデの賛歌を知らない人はいないでしょう。多くの人たちに愛されているこの詩篇23篇、ダビデ王は主なる神によって与えられた祝福を歌います。彼はこの賛歌をまず「主と自分との関係」を「羊飼いと羊」との関係に例えています。そして、羊飼いなる主を心から崇めるのです。「主は私の羊飼い」、私は彼の羊だと、そのようにダビデは神と自分の関係を歌います。これは彼自身の経験に基づくものでした。彼自身が羊飼いであったことは皆さんもよくご存じです。Iサムエル17：34aに「ダビデはサウルに言った。「しもべは、父のために羊の群れを飼っています。」とあります。

この23篇の中でダビデは、彼が良く知る羊飼いと羊、また、主人とゲストという二つの比喻を用いて、自分と神との関係を、また、ダビデが神からいただいた九つの祝福を記しています。主を知ることによって、神はこんなにすばらしい祝福を私にくださったと、彼は九つのことを表わしているのですが、それは私たちイエス・キリストを信じる者たちにも同じように与えられた祝福です。それがどのようなものか、ごいっしょにこのみことばから見ていきましょう。

☆ダビデが神からいただいた九つの祝福

A. 羊飼いと羊 1-4節

1. 満足：必要が満たされる 1節

神は私に「満足」を与えてくれる、これが最初の祝福です。1節に「【主】は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。」とあります。お気づきになったように、ここに記されているダビデが神からいただいた祝福、これはイエスを信じるひとり一人に与えられるものです。ダビデはここで「主は私たちの羊飼い」とは言わず「【主】は私の羊飼い。」と言っています。私と羊飼いの間に個人的な関係がある、ゆえに、この祝福は私のものだとしてダビデは先ず強調するのです。神を知ることによって私は本当の満足を神からいただいた、神は私の必要を常に満たして下さると。必要な水も食料も与えられる。また同時に、あらゆる敵からも守られると言います。というのは、それが羊飼いの最も大切な務めだからです。

羊飼いは羊の健康と安全を第一に考えます。その結果、たとえ自分のいのちを落とすことになったとしても、羊飼いは喜んで羊を守ろうとするのです。そのことをダビデ自身がこのように言っています。Iサムエル17：34b-36a「:34…獅子や、熊が来て、群れの羊を取って行くと、:35 私はそのあとを追って出て、それを殺し、その口から羊を救い出します。それが私に襲いかかるときは、そのひげをつかんで打ち殺しています。:36 このしもべは、獅子でも、熊でも打ち殺しました。…」と。ですから、このようにダビデは羊飼いとして羊を守り続けていたのです。まさに、それを神が私に対して為して下さっていると彼は語るのです。

ダビデは主が羊飼いであるゆえに「私は、乏しいことはありません。」と歌っています。私のすばらしい羊飼いは私のすべての必要を満たし続けてくれると。言い方を変えるなら、ダビデは主からいただいた「最高に幸せな人生」を喜びと満足をもって生きていくために、主は私のすべての必要を満たして下さっていると言うのです。本当の幸せをくださった神がその人生を生きるために必要なすべてを与え続けて下さっている、そのことを覚えてその神に感謝をささげるのです。そして、その約束は私たちのものでもあり、最初に話しました。イエスが言われたように、ヨハネ10：10「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」、ただあなたが永遠のいのちをいただくだけでなく、この地上にあっても神の祝福をいただきながら幸せな豊かな人生を歩むことができるのです。

パウロはピリピ4：11で「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りる

ことを学びました。」と言っています。物があるからないからと、そういうことに左右されるのではなく神がいてくださることに本当の満足があると言うのです。神が私のすべての必要を満たしてくださると。こういう人生をダビデは生きたわけであり、そして、感謝なことに、私たちもそのような人生を生きることができるのです。問題は、このダビデのように、あなた自身が主が与えてくださった素晴らしい人生を楽しみ、感謝しながら生きているかどうかです。その人生のカギは主が与えてくださったものに、たとえそれが自分の願ったことと違ったことであっても、「与えられたものに感謝しているかどうか」です。こんなものを私は求めていない、もっとあれもこれも欲しいではなく、主が与えてくださったものに私たちは感謝します。なぜなら、主の約束は「あなたの欲しいものを与える」ではなく、「あなたの必要を満たす」だからです。

信仰者の皆さん、このような人生を私たちは生きることが出来るのです。神の約束を信じて、神が私のすべての必要を満たしてくれれば、満ち足りた人生を生きることが出来るのです。それがダビデが歩んでいた人生でした。

## 2. 平安 2節

二つ目は2節に出て来ます。「平安」ということです。「主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。」と。

### 1) 主は私を緑の牧場に伏させ

この「緑の牧場」とは、牧草地が緑の草で覆われている様子、描けますね。羊が食べる草が十分にある場所です。羊飼いの役割は羊の食べ物を満たすことです。ですから、羊飼いは羊を緑の牧場へ連れていくことが必要なのです。そして、そこで羊は何をしているのか？「伏させ」とあります。つまり、横たわっているということです。今説明しますが、羊は容易に横たわることはないのです。本当の平安、安心がなければ横たわることをしない動物です。というのも、羊は些細なことにも恐れを抱いてパニックを起こしてしまうような大変弱い生き物なのです。実際に、羊の牧場主でもあったフィリップ・ケラーはこのように羊の習性を話しています。「肉食の動物の存在は彼らに休息をもたらすことはない。それだけでなく、羊は特に夏には鼻ばえ、馬ばえ、牛ばえ、だになどによって全くの狂乱状態に追い込まれることがある。これらの害虫に悩まされると羊は横になったり休んだりすることが文字通りできなくなる。それで足で立ったままいて、脚を踏み鳴らし頭を振って害虫の難を避けるためにはすぐにやぶの中にも突進しかねない。」と、大変不快な状態になるのです。そういう状態で羊が横たわることは絶対にないのです。

ですから、羊飼いは羊の行動を細かく見守って、何か問題があるなら直ちに羊を助けるために行動に移ることが必要なのです。常に、羊たちが静かに落ち着いて平和に過ごせるようにと、そのことを願いながら羊たちを見守っているのです。ですから、ここでダビデが言ったように、羊たちが伏せた状態である、横たわっている、つまり、あらゆる恐れから解放されて安心しきった状態であるということです。ダビデは主によって羊と同じように、どんなときでも私は平安をもって安らぐことができる、それをこの2節で告白したのです。ダビデは詩篇4：8でこのように言っています。「平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。【主】よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。」と。同じことを言っています。神が私を休ませてくれる、ちょうど、羊がすべての恐れや心配から解放されて緑の牧場に伏せているように、私もそのように日々を過ごすことが出来ると。

### 2) いこいの水のほとりに伴われます

羊飼いは食べ物である草を与えなければならないだけでなく、羊のために水を提供しなければなりません。羊飼いは水飲み場に羊を連れていくことが必要です。ですから、羊飼いの大切な務めの一つはその水のありかを知っているということです。

#### (1) きれいな水が飲めるところでなければならない

フィリップ・ケラーはこう言います。「羊は喉が渇くとそわそわし始め、渴きを満たすために水を求めて出て行く。きれいな澄んだ水を飲める場所に導かれないと、彼らはしばしば汚れた水たまりから水を飲むことになり、そのため、線虫類や肝臓ジストマなどの病原菌のような寄生生物を取り込んでしまう。」、汚れた水を飲むとこのような病気に罹ってしまうということです。ですから、羊飼いはよく注意してそういうことがないように安全できれいな水飲み場に羊を連れて行かなければならないのです。

#### (2) 波が立たない状態

「いこいの」とは波が立たない状態です。風が吹いて波が立っている状態ならたとえ水がきれいであっても羊はその水を飲もうとはしません。また、水の流れが速かったりすると羊は恐れて水を飲もうとしません。ですから、羊が安心して水を飲むためには恐怖心を抱くことがない「いこいの水」、波立っていない、流れが遅くない、そういう水飲み場に連れて行かなければならないのです。ですから、ダビデは羊飼いがそのような配慮をもって羊を導くように、神もそのように働いてくださると言うのです。

恐れを除いてくださると。私たちはすぐにいろいろなことに恐れを抱いてしまう者です。今でも、私たちはこういう病気（コロナウィルス）が流行っていると大変な恐れを抱きます。将来のことを考えて多くの人たちは恐れを抱きます。でも、神はそのすべてを知った上で私たちに励ましを与えてくださいます。そのような恐れに敗北するのではなく、恐れに対して勝利を与えてくださり、そして、神だけが本当の平安を私たちにくださるのです。ダビデはこのように言っています。詩篇29：11「【主】は、ご自身の民に力をお与えになる。【主】は、平安をもって、ご自身の民を祝福される。」と。

なぜそういうことができるのか？なぜなら、神は平和の神だからです。パウロはローマ15：33で「どうか、平和の神が、あなたがたすべてとともにいてくださいますように。アーメン。」と言っています。平和の神だから、平和の源である神だから、その平和を私たちにくださるのです。この「平和」と訳されていることばも今話している「平安」もどちらも同じです。「peace」です。神が本当の「peace」を私たちの心のうちに与えてくださると言います。ですから、ローマ15：33で使われている「平和」ということばとイエスがヨハネ14：27で言われた「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」という「平安」は全く同じことばが使われているのです。この神ご自身の「平安」が私たちには与えられたのです。ダビデはそれをいただきその平安をもって歩んでいたのです。ちょうど、羊が「いこいの水のほとりにともなわれ」て、そして、そこで恐れを除かれてしっかり水を飲むことができるように、また、緑の牧場に横たわることができる、あらゆる妨げを除いてくださるから平安のうちに横たわることができるのです。

ですから、ダビデは神がくださる祝福は神ご自身の平安である、だから、それをもって私たちは生きることが出来ると言います。

### 3. 力 3節

3節に「主は私のたましいを生き返らせ、」とこのように記しています。ここでダビデは力について話をします。「生き返らせ」ということばは「回復する、復活する、新たに作る、元気、活発にする」という意味です。このことばと同じことばが詩篇19：7で使われています。「【主】のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、【主】のあかしは確かで、わきまのない者を賢くする。」、ここの「生き返らせ」は「霊的に新しくされる」という意味で使われています。まさに、霊的なリバイバル、復興という意味があります。ですから、「主は私のたましいを生き返らせ、」とは自分自身の霊性が新たにされる、自分の信仰が今一度元気にされるということなのです。

また同時に、この「たましい」ということばには「いのち」という意味もあります。ということは、からだを回復する、元気にする、力を与えるという意味でも取ることができます。ですから、恐らくこの3節でダビデが言いたかったのは、神は私たち信仰者の霊的にも身体的においても活力を与えてくださるということです。主のみこころが成されることを信じて信頼するなら、私たちはそのように必要な力が与えられるのです。

恐らく、多くの皆さんはそのことを日々の生活で経験されているでしょう。日々、私たちの肉体は弱っていきます。でも、神が力をくださる。信仰においても、ときに私たちの信仰がいろいろな出来事で落ち込みそうになっても、神を見上げるなら、私たちの信仰を神は助けてくださって、その中にあって神から新たな力をいただきながら歩むことができるのです。信仰者の力は神にあります。神が私たちの力であり、この力によって私たちは生きることができます。ダビデも「主は私のたましいを生き返らせ、」と、主が私自身の力なのだとそのように神を称えるのです。

### 4. 導き 3節

3節の後半に「御名のために、私を義の道に導かれます。」とあります。つまり、神は私たちを導いてくださるということです。大変感謝なことだと思いませんか？羊という動物はすぐに道に迷ってしまいます。どんなにその環境に慣れていてもすぐに正しい道から外れてしまうのです。だから、羊には彼らを正しく導く羊飼いが必要なのです。そして、ダビデは「神は私を正しく導いてくださる」と言います。「義の道に導かれます。」と言います。神の前に正しい道に導いてくださるのです。そんなすばらしい羊飼いが私たちに与えられたのです。最高の羊飼いが私たちに与えられたのです。

ですから、私たちも主のみこころに沿って生きていくならダビデと同じように歩むことができます。私たちはみことばを通して神のみこころを知ります。同時に、聖霊なる神の導きを求めながらその神にすべてをゆだねて歩んでいこうとするなら、神は私たちを確実に導いてくださる。これは私たちには大きな希望です。なぜなら、主のみこころに従う以外に神の栄光を現すことができないからです。ですから、当然、主のみこころに従うように主は私たちを助けてくださいます。

ですから、私たちは自分自身の勝手な計画を神の前に捨て去ることで、同時に、私たちは自分が勝手に作る計画もタイミングもすべて捨てて、「あなたのみこころが成るように、そして、あなたの最善

のときにみわざが為されるように」と、すべて明け渡して主に従うことが必要です。私たちはみことばを通して何が神の前に正しいのかを知ります。そして、与えられた助け主がそのように歩いていくようにと助けを与え続けてくださるのです。皆さんに考えていただきたいことは、生きておられる真の神があなたを導いてくださるということです。生きた神があなたの人生を導いてくださるのです。何という感謝であり、何とわくわくする人生を私たち信仰者は生きることができるのか？神が導いてくださるのです。

「御名のために、…導かれます。」と書かれています。これは主はこれらすべてのことをご自身の栄光のために行われるということです。神はあなたを導くことによって神ご自身の栄光を現されるのです。そして、神のみこころに従うならその人は主に似た者へと変えられて行きます。成長させていただきます。成長しているその姿が人々の前にすばらしい証となっていくのです。ですから、信仰者の皆さん、みこころに従うということは「最高の生き方」だということです。それは神の栄光を現すだけでなく、あなたにとっても最善だからです。みこころに従うときに、今見ているような神の祝福を私たちは経験します。でも、私たちがそのみこころに逆らうなら、悲しいことに、その祝福を逃してしまいます。ダビデは主の導きがあることを知っていました。そして、その導きを求めながらそれに従ったのです。神だけが私を義の道に導かれる、私の導き手なのだと言います。

## 5. 保護 4節

「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいを恐れませんが」と、神は私をどんなことがあっても保護してくれる、守ってくれるということです。羊飼いが羊を導いていくとき、急な谷に面した危険な道を通ることがあります。また、灼熱の太陽のもと移動しなければならないこともあります。私たちの人生においてもいろいろなことがあります。死に直面することもあります。しかし、皆さんに見ていただきたいのは、「死の谷を歩くことがあっても」とは書かれていません。「死の陰の谷を歩くことがあっても」となっています。これは死の「陰」を歌っているのであって「死」そのものではありません。確かに、人間にとって「死」は最大の悲劇だと考えます。ダビデはここで「死の影の谷」と言っています。つまり、かつては実態であった「死」が今は「陰」だということです。

イギリスの大説教家であったスポルジョンはこう言っています。「臨終のときは「死の谷」ではなく「死の影の谷」なのです。死はその本質を取り除かれ死の陰だけが残っているからです。」と。イエスを知らなかったなら「死」は現実の問題です。どうすることもできない問題です。当然、その死を考えるほどに私たちには恐れが込み上げて来ます。だから、私たちはそのことを考えないようにします。なぜなら、「死」は絶対に避けることの出来ない現実の問題であり、同時に、死が終わりでないことを私たちは知っているゆえに、死後に対する不安が私たちに恐れをもたらすからです。

しかし、救われた私たちは死に対する恐れから完全に解放されました。それは主イエス・キリストが死に対して敢然と勝利を得られたからです。だから、パウロが言うように「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」（Iコリント15：55）と、かつてはそこにとげがあったのです。触れば痛かったのです。バラもとげがあるバラを触ると痛いですが、でも、とげが除かれたら自由に触ることができるように、「死」というとげ、私たちに苦しめて来た、私たちに悩まして来た、不安に落とし入れて来たこのとげはすべて除かれてしまったのです。私たちがたとえ死に直面しようと、死を経験しようと神は変わらずあなたを導き続け守り続けてくださるのです。

この勝利の主があなたとともにいてくださるのです。4節ではそう言います。「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいを恐れませんが」と。なぜなら、「あなたが私とともにおられますから。」と。ここで注目いただきたいのは「あなた」ということばです。これは神に対するものですが、初めてここに出て来ます。これまでダビデが神に対して「あなた」と言っている箇所はありません。この4節が初めてです。なぜ、このことばをダビデはここで使ったのか？これは「神との親密さ」を言うのです。神との距離を感じているのではありません。ダビデは自分の愛する方であり、こんな自分を愛して下さっている方、その関係が大変親密であること、親しいこと、そのことを確信しているのです。しかも、これまでは羊飼いが羊の先頭に立って羊を導いていた、そういう絵を私たちは見ることが出来ました。でも、「死の陰の谷を歩くことがあっても、」、たとえ大変な苦しみに遭っても死に直面しようとも、そのような災いを私は恐れない。なぜなら、「あなたが私とともにおられますから。」と。言うのです。

今度は前を歩いているのではない、いっしょに歩いてくださるのです。横にいてくださっていると。お気づきになりますか？なぜなら、このような「死」という大変恐ろしい危険な目に遭遇したときに、神との距離を感じるのではないのです。「どこにおられるのですか？神さま」ではなく、ダビデは言います。「私はわざわざいを恐れませんが。あなたが私とともにおられますから。」と。

感謝なことに、私たちは今聖霊なる神をうちにいただいています。うちにいる以上、決して離れることはありません。決して、神と私との距離を心配する必要はありません。なぜなら、私たちに内住して

くださっているからです。ですから、ダビデは言います。どんなことがあっても神は私とともにいてくださると。私の横にいて、私とともに歩んでくださると。だから、私は何があっても恐れな、却って、感謝をもって日々を過ごすことができると言うのです。同じことが、今私たちにもできます。今、確かに世界中でマスコミはこの病気について余り良い知らせを伝えてくれません。聞いていると私たちは不安ばかりが募るかもしれません。でも、私たちはその中にあって、当然、しなければならないと言われていることは守ることが必要です。でも、感謝なことは「主が私とともにいてくださる」ことです。今、どんな状態に私たちは置かれているのか？どんな状況を生きているのか？そんなことをすべて分かってくさっている神がともにいてくださると言うのです。私たちクリスチャンはこの神によって永遠に守られているのです。感謝なことだと思いませんか？

## 6. 交わり 4節

「あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」とあります。

1) むち : 「むち」と聞くと、何となく私たちはカウボーイが使うような「むち」を想像しますが、これは木製で大体長さが60センチほどの棍棒です。フィリップ・ケラーはこう言っています。「羊飼いはやぶの中に入って行って、若木を選んで根元から掘り起こす。それを削って自分の手にフィットする形にする。それができると、その棍棒で何時間も練習して驚くべき速さと正確さでそれを投げる方法を覚えていく。」と。ですから、その棍棒を自分の手に合うように作って、それを投げてしつかり的を射るようにと訓練をするのです。なぜなら、この「むち」は羊を襲う動物たちと戦うための道具だからです。ライオンであったり熊であったり、野犬、オオカミもいたでしょう。それらを倒すためにこのむちを使ったのです。

2) 杖 : 今でもよく見ますが、片方がU字に曲がっている形の杖です。どのようにこれが使われたのか？(1) 羊を導くために=ケラーが言うように「細長い先の方でやさしく動物の脇腹に触って、その押す力で羊を行くべき方向へと向かせていく」と。(2) 小羊を母親のところに戻らせるために=今度はそのU字になったところです。「生まれた羊の子どもが母親から離れたときに、U字になった方でその子をつかんで母親のところに連れ行く」と。なぜ、それを使うのか？ケラーは言います。「人間の手の臭いが付いていると自分の子どもでも拒否する母親がいるから」と。(3) 羊を自分のところに引き寄せるために=そうして、羊飼いは自分の愛する羊たちを一頭ずつ細かく調べるのです。

こうして、羊飼いは羊と親しく交わっていきます。羊飼いは羊を愛して、先に見たように、食べ物においても飲み水においても、いろいろなケアをしながら健やかに育ていくように常に様子を見るのです。ダビデはそのことをよく知っていました。ですから、「あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」と言うのです。むちを見るときに、私の羊飼いは私を守ってくれる、杖を見るときに、その杖をもって私を導いてくれる。そして、私を引き寄せて私と親しく交わってくださる、だから、慰めだと言うのです。こうしてダビデは、真の神と個人的な親しい交わりを持つことが出来る、それを楽しむことが出来ると思ったのです。

すでに見たように、私たちは聖書を通して神のみこころを知り、そして、この神に祈りをささげ、礼拝を通して私たちはこの方と交わることができるのです。こんな祝福に私は与えることができます。主は私に本当の満足を与えてくださる。主は私に神ご自身の平安をくださる。私が歩いていくために必要な力を備えてくださり、私を導いてくださり、私をどんなときにも守ってくださり、そして、私にすばらしい神との交わりを与えてくださる。

## B. 主人とそのゲスト 5-6節

主人と客人との関係を使って神との関係、また、神が与えてくださった祝福についてあと三つ彼は教えるのです。

## 7. 喜び 5節

5節「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。」、ダビデは彼の周りに敵がいなくなったわけではありません。彼はここで神は私に「食事をととのえ」してくれると言います。神が私に満足をくれるということをするのですが、だからと言って、問題が解消したわけではないのです。ダビデが言うのは、その問題の中にあっての満足であり、問題の中における平安、喜びという祝福のことです。ですから、この7番目にダビデが教えるのは「喜び」です。

ダビデはここで主はまさに客人を迎えるすばらしい主人のようなお方だと言います。彼が言う祝福を「私の敵の前で」とより具体的に説明するのです。皆さんに描いていただきたいのは、すばらしい主人はゲストに対してまず少なくとも食事を提供しその頭に油をそそいだのです。もちろん、その客人の足を洗うということも行います。そのような様子が新約聖書ルカの福音書7章に書かれています。あるパリサイ人が、実は、その人の名前はシモンであるとルカ7:44から教えています。このパリサイ人のシモンはイエスといっしょに食事をしたいとしてイエスを招くのです。そして、イエスはこのパリサイ人

の家に入って食卓に着かれます。そうすると、その町の一人の罪深い女がイエスのもとにやって来ます。彼女は「:37…香油の入った石膏のつぼを持って来て、:38 泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った。」と7:37-38で教えています。想像できますね。このようなことが起こったのです。

ここでイエスはシモンにこういうことを言っています。7:44-46「:44 そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。「この女を見ましたか。わたしがこの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。:45 あなたは、口づけしてくれなかったが、この女は、わたしが入って来たときから足に口づけしてやめませんでした。:46 あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。」と。このような習慣があったということです。ですから、私たちが今見ているように、主人は客人を招き入れるときに、このようなことをして歓迎をするのです。

ダビデは「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、」と、敵がいよいよといまいと、どのような危険が訪れようと、主はダビデの必要を常に満たし祝福を与え続けてくれたと言うのです。「敵の前で食事を整えてくださった」と。みことばを見る時に、神はあなたを悩ませていること、あなたを苦しめていること、それらを必ず除くとは約束されていません。神が約束されたのは、その中であってそれらに優る喜びをあなたは得ることができるということです。よく考えてみるなら、私たちにとって障害と思えることが実は障害ではなく私たちにとって必要なものであったと、そのことに気付かされることが多々あります。私たちはいろんな問題に遭遇しないと私たちは神の所に行こうとしないからです。では、神のところに行ったら問題が解決するのか？そうではありません。私たちは問題に悩まされて来ました。でも、イエス・キリストによって、神によってその問題に私たちは勝利するその助けをいただくのです。なぜなら、私たちは問題を見ていたのが神を見るようになるからです。ですから、敵の前で、本来ならば敵が自分を苦しめるはずなのに、その中であって神は私のために必要なものを備えてくださる、歓迎してくださると。しかも「私の頭に油をそそいでくださる」と。先に見たように、ゲストはこの主人によって、一般的にはオリーブオイルですが、それを頭に注がれて歓迎を受けるのです。

ダビデは私の主人である主なる神は私をこんなふうに歓迎してくれると言いました。「私の敵の前で」と言うのもう、敵が捕らえられているかのような光景を描かせてくれます。そこに敵がいるのです。つまり皆さん、どんな敵であったとしても私たちはその敵に勝利を得ているということです。敵のもたらすあらゆる苦悩というものに勝利すること、それらに優る喜びを私たちは得ることが可能になったのです。神がくださるのです。かつての私たちは何とかそういう問題を自分で対処し自分で解決しようとして来ました。その結果、私たちにはいつも失望が虜にしていたのです。いつも失望が私たちを苦しめていました。でも感謝なことに、私たちはその中であつても悪に対して善で応答できるように神が助けてくださるし、いろんなことで心が塞いでいても、神を見るときにその中であつてその問題さえも感謝できるように神が変えてくださるのです。皆さん、私たちは状況を変えることはできなくても、その状況に優る神の祝福を持って歩むことができるのです。

ダビデはこう言います。「私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。」と。神からの祝福というのは、ちょうど、宴会において杯があふれているように、まさに喜びがあふれるように神の祝福によって生活が満たされている。まさに、その祝福が溢れ出るように。ダビデはいのちを狙われることもありましたが、でも、そのような中であつて愚痴を言って神に不満を言うのではない、その中であつて彼はこの神がくださる祝福によって、まさに杯が溢れ出るようにその祝福に満たされた人生を、そのような祝福をくださった神を称えるのです。なぜなら、これはすべてダビデの賛歌だからです。神への感謝の歌です。

## 8. 不変の愛 6節

最後に6節、「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みが、私を追って来るでしょう。」と、神の不変の愛です。変わることはない神の愛を歌うのです。「私のいのちの日の限り、」、この地上においてということです。

・主のいつくしみ : これは優れたもの、正しいものという意味のあることばです。

・主の恵み : 優しさ、思いやり、愛情、あわれみです。様々な英語の聖書はこれを「不動の、揺るがない愛、慈悲、尽きることはない変わることをの愛」と訳しています。詩篇17:7には「あなたの奇しい恵みをお示しください。立ち向かう者から身を避けて右の手に来る者を救う方。」と書かれています。

つまり、ダビデがここで言いたかったことは、神のすばらしい愛は揺るがない愛であり不変の愛である。私はそんな愛で愛されているということです。もし、神が私たちの罪に従って私たちに対して扱いを変えたとしたら、もう私たちはすでにこの地上にいないかもしれません。詩篇103:10に「私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。」とある通り



です。神はこんなにどうしようもない罪深い私を愛してくださっているのです。

ですから、ダビデはこの詩篇 103 : 1-5 でこのように歌っています。「:1 わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。:2 わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。:3 主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、:4 あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、:5 あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、鷲のように、新しくなる。」と。これが私たちの神なのです。ダビデは残りの人生においてもこれまでと同様に、神の不変の愛、慈愛の愛が尽きることなく与えられ続けることを確信していたのです。たとえ、どのような苦難が訪れようと私は愛されていると。「いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。」、この祝福が私を追って来る、私から離れることはないということです。私たちの神は契約の神であられるのです。つまり、約束をなさったら必ず守られるお方だということです。ルカ 1 : 72-74 をご覧ください。「72 主はわれらの父祖たちにあわれみを施し、その聖なる契約を、:73 われらの父アブラハムに誓われた誓いを覚えて、:74 75 われらを敵の手から救い出し、われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される。」

だから、私たちはその確信に立って生きることができるのです。神はあなたや私のことをだれよりも分かってくださっています。どれほど弱く愚かな罪深い者か、そのことを知った上で神は私たちを愛してくださった。受け入れてくださった。そして愛し続けてくださっていると言うのです。モーセは言います。申命記 7 : 9 「あなたは知っているのだ。あなたの神、【主】だけが神であり、誠実な神である。主を愛し、主の命令を守る者には恵みの契約を千代までも守られるが、…」、約束を守られるお方です。

## 9. 永遠のいのち 6節

「私は、いつまでも、【主】の家に住まいましょう。」と。この「主の家」とは「幕屋」のことです。人々はそこで神との交わりを楽しんで来たのです。ダビデはこの地上においても、そして、永遠にこのような偉大な神と交わることができると言います。そして、このお方とともにこの地上においても、そして、永遠とともに過ごすことができるのだとそのように彼は確信していました。この地上でも永遠にも神とともに過ごすことができると。その確信を持ちこの祝福をくださった神を称えながら生きたのです。

ダビデはどんな時でも満足を得、平安に満たされ、常に霊肉ともに力を得、みこころのままに導かれ、どんな時も守られ、常に主と交わることができ、常に主の喜びに満たされ、変わらない主の愛によって愛され、主と永遠を過ごせることを楽しみにして、与えられた日を感謝を持って主の栄光のために生きていたのです。それがこの詩篇 23 篇の中でダビデが神にささげた賛美です。神に感謝をささげたのです。

私たちが考えなければいけないのは、私はこのように歩んでいるかどうかです。あなたはダビデと同じ祝福をいただいたのです。ということは、ダビデがこの祝福を楽しんだように、あなたもその祝福を楽しむことができるのです。信仰者の皆さん、思い出すことです。あなたの信じている神を！そして、あなたが神からいただいた祝福を…！ダビデが生きたように、私たちもこの神を信頼して、この神に強い信頼を置いて、このみことばの約束をしっかりと心に留めて私たちは生きることができます。

神に感謝をささげながら歩むことができる。そんな人生を生きることができるのなら、そのように生きていきましょう。なぜなら、それが主の喜ばれる信仰者の歩みだからです。